

学校を中心とした子どもの課題発見から支援までのスクリーニングシステム (YOSS)

山野則子 大阪公立大学 現代システム科学研究科 教授

ただいま御紹介いただきました大阪公立大学の山野と申します。画面に出ております「子どもの課題発見から支援までのスクリーニングシステム (YOSS)」、この御報告をしたと思います。

私のプロフィールですが、これをなぜ入れたかといいますと、文科省、内閣府、厚労省、デジタル庁と、国の中のいろいろな領域で、横断的に多角的な視点で考えるチャンス頂き、今の研究にもつながっているということの一つ加えさせていただきます。

本日の発表の流れは、I から V 番までで、「総合知」が輝く未来社会をどう作っていくかということで、まず社会課題、子どもに焦点を当てた、すごく実践現場の話です。子どもの課題に焦点を当てて未来ビジョンを想定し、課題の整理を行い、2 つの研究を進めてまいりました。IV 番目の話はもう終わっていますので、それがあったからスクリーニングに行けたという流れで、今、載せております。

まず、子どもの社会課題をどう取り上げたかというところで、これはコロナ感染症における子どもへの影響で、簡単に上の左側を見ていただきまして、90%の子どもたちが何らかのストレスを感じているということが厚生労働省の依頼を受けて行った調査で明らかになりました。その右で、30%の子どもたちが学校に行きづらいと考えているということです。その子どもたちが、下で、性的な問題、あるいはゲーム依存という見えない行動化が深刻になっているというのがこのコロナの影響です。

そういった状況の左側を御覧ください。今のコロナの問題は非常に大きくいろいろなところに浸透しているわけですが、もともと子どもの貧困や孤立という問題が虐待を生み、不登校・非行に発展し、社会的排除につながっていくという、この循環していく仕組み、社会的な課題が 30%ぐらいあるのではないかということは今までの研究で明らかにしています。それに対して、目指す未来のビジョンとして、オセロで白が黒になる形で、この 4 つ、貧困と孤立が緩和され、虐待が防止され、非行や不登校が対応され、社会的包摂になっていくという社会をどうやってつくろうか、これが未来のビジョンだと位置づけて動いてきたと捉えていただけたらと思います。

今、JST の RISTEX で助成をいただいて、このような形で子どもたちの「誰一人取り残さない支援の仕組みづくり」ということに取り組んでおります。私は社会学系の社会福祉

学の人間です。そこでここには情報の先生であったり AI の先生であったりという、こういったいろいろな他領域の専門知を生かしてこの研究を進めているということをお見せしています。

その流れの中で一つ大事なポイントとして、なぜ学校なのかというところで、先ほど申し上げました 30%の子どもを拾うというのは、学校しかできません。児童相談所と皆さん思われるかもしれませんが、福祉系、児童相談所はすべての子どもに対して 1、2%ぐらいしか実は拾っていません。そういう意味で、学校の中でつないでいく人材、スクール・ソーシャルワークという、つないでいく人材をどうつくるのか。学校の中で拾い上げていく仕組み、これがスクリーニングなのですが、これをどう作っていくのかという 2つに大きく課題設定をして、この研究に取り組んできたという経緯です。

このスクール・ソーシャルワークの研究につきましては、これは 2012 年ぐらいから取り組んで、社会実装として、4 番目の制度化まで進めてまいりました。これはエビデンスに基づくプラクティスという形で、単純に教育と福祉と、パワーポイントでお見せしています海外の知見などを活用しながら、エビデンスに基づく仕組みをつくりました。

その紹介がこの後、何ページかありますので、ここは時間の関係上、後で見てくださいたらと思います。

全国展開をするために 6 ブロック作ってきました、こちら JST で助成をいただいて広めていき、海外のシンポジウムを開くという形で、クラウド上に実際のソーシャルワーカーが使っていけるような仕組みを落とし込んでいき、政府でこれを、総理官邸でプレゼンもして、法定化するということまでやってきたというのがこの話です。

ところがこのことが、学校という組織がなかなか閉じた世界で、前のパワーポイントにありますように、普通でしたら組織といいますのはラインがあって徐々に上がっていくのですが、学校組織といいますのは管理職と担任だけという形で、なかなか教師の多忙化、負担の増大、IT 知識の不足、左に書いてありますけれども、共有することが難しいという課題がありまして、全ての子どもたちから拾い上げるという仕組みになかなかありませんでした。

さらに、前にありますいろいろな研究の知見を活用して、パワーアップして取り組もうとしているのが現在の研究です。

スクリーニングといいますのは、全ての子どもたちから課題を拾い上げて、そこから普通の欠席、遅刻、諸費滞納、忘れ物という、普通に身近な項目です、こういった項目を

AI 判定も入れて評価していくという、今画面にありますようなシートからピックアップして、A、B、Cの支援につないでいくという、AI を活用してデータを蓄積し、循環していくということを今現在、取り組んでおります。

ここは成果を見せておりますが、不登校が3分の1になったとか、諸費滞納が84%改善したとか、かなり改善が見られています。

文科省の委託を受けてこの効果を計ったのですが、教員の負担感というのはもともとありますので、増加するわけではない、もっと減ってほしいところですが、現状では増加するわけではないということが見えてきました。

こういったことを積み重ね、さらに AI を活用し、どんどんパワーアップしているというのがこのパワーポイントです。

ここで、初めはエクセルでやっていたら、右から左がクラウドを利用して AI にしていくというところ。今現在、33 自治体と契約を結んでやっているわけですが、IT 知識への不足で抵抗感があったり、個人情報の問題があったり、ということで、ここにあるボトルネックが非常に大きくあります。広がっていく壁があります。そこに工学、法学の先生方の知見であったり、特許を取るということで知財であったり、と取り組んでいるわけですが、なぜ他領域の先生方がここまで一緒にやってくれるかというところは、だんだん子どもの Well-being というところに皆さんが共感され、子どもの問題というのはみんなが分かるというところで、今現在は大学を挙げての取組になっております。

社会実装という意味では、実践フィールドである、学校の中に子ども食堂ができたり、それによって遅刻がゼロになったり、自治体の行政レベルでいろいろな領域の人を集めて一緒に議論をするということで、市の中の展開、いろいろな人と関わり合いながらやっていくという展開を生んだり、企業の方、経営の視点で協力いただきまして、システムではパナソニックと今、また、こういったニュースを生保協会から寄付をいただいて、別のマスコミの知見を活用して、どんどん全国にこういうニュースを発信したりという形で進めています。今現在、スクリーニングも国として取り上げてくださるところまでやってきました。

そこでパナソニックと協働で記者会見しました。私の右側が学長ですが、一緒に大学として発表した次第です。

今現在、このように全国展開で広げようとしているお知らせです。

これは最後のパワーポイントですが、この「総合知」を活用してきたことで、今現在は

左側ですが、学内でもいろいろ話し合っ、「総合知」が内在化していくようにコンソーシアムをつくって、地域、NPO、自治体や企業が参画した、こういったプラットフォームを作ってやっていきたいというところに今、立っている次第です。

これは後でディスカッションのときにお話ができたらと思っています。

以上、私からの話は終わりたいと思います。御清聴、ありがとうございました。

【質疑】

(菅) 子どものこういったことといいますのは「総合知」であることは確かなのですが、自治体によって考え方が違っていたり、個々の子どもについてもかなり違っていますので、どうしても個々のアプローチになりそうな感じですけども、その辺は「総合知」という視点からどのように解決していこうとお考えなのでしょうか。漠然とした質問でお答えにくいかもかもしれませんが、よろしく願いいたします。

(山野) まずは、このスクリーニングシステムといいますのは個別の話に行く前の仕組みづくりですので、学年会議で全員の子どもたちを洗い出していくわけですが、そこに心理学の知識、心理学の研究者であったりスクールカウンセラーであったりが入ってくださり、そしてソーシャルワークの知識、教育の知識という形で学校にも入り込んで一緒に議論をして、どのようにして一事例をたたき台にしながら仕組みを作っていくのかという議論になっていく、そのような流れで、個別事例対応に終わらせない仕組みづくりに、それぞれの先生方の知見も生かして取り組んでいるという次第です。それから個人情報の危うさやセキュアな環境を作ってクラウドの信頼性を高めるとか、そういったことも工学の先生や企業が参画することで学校がだんだん変わってきている、すごく不安で拒否的だったところが変わってきているということもございます。

(菅) 分かりました。ということは、学校なり教育委員会、そういうところも、これに関しては非常に協力的であるということでしょうか。

(山野) いえ、なかなかそう順風満帆の協力的ではなく、先ほどのボトルネックはすごくあるところがございます。

(菅) はい、分かりました。ありがとうございました。

(上山) 質問といいますか、今までの報告も大体そうですが、やはり実践型です。実践型の活動の重要なことは、実践の時に、既にある既存の「知」のあり方を使うということですが、もう少し知りたいなと思っていますのは、実践の中から出てきたものが、「知」

のほうにどうフィードバックしていくのかということです。むしろ「知」のほうはかなり専門的にパッとやられている方が多くて、そのフィードバックのあり方のようなことが「総合知」の一つの役割だとは思っていますけれども、こういうことを体験されたことというのはおありでしょうか。

(山野) 実践から「知」へのフィードバックですね？

(上山) 専門知へのフィードバックです。

(山野) 今パッと浮かばないのですが、おっしゃられますとおり、専門知から実践家への矢印は非常に多いのですが、実践の現場から専門知のほうへのフィードバックというのはありますけれども、今パッと浮かばないのですが、それぐらい多分弱いのだと思います。御指摘のとおりだと思います。そこを体系立てたり理論立てたりしていく必要があるかなとは思っています。

(上山) 分かりました。